

# 長崎県諫早市方言における与格と方向格の体系的記述

言語学・応用言語学専門分野

2019（平成 31）年入学

藤本悠花

2023（令和 5）年 1 月提出

## 要旨

本研究の目的は、長崎県諫早市方言（以下、諫早市方言）における与格と方向格の体系、特に与格と方向格の交替を明らかにすることである。与格と方向格は、同じ意味役割を示し、相互に置き換えられる場合がある一方で、置き換えられなかったり置き換える際の選好性が異なったりする場合がある。これまでの九州方言の与格と方向格に関する先行研究としては、神部（1984）や小林（1996）がある。しかし、与格や方向格が出現する場合を列挙する形の記述であり、両方の格が容認されるのか、一方の格のみ容認されるのかが明らかではない。またその格が容認される理由に関する分析を示せていない。そこで本論文では、名詞句階層と移動の局面という観点を導入し、与格と方向格の使い分けについての一般化を目指す。加えて、老年層と中年層、若年層の世代間で比較を行うことで、通時的な変化の記述も試みる。

## 目次

1. はじめに .....	1
2. 諫早市方言について .....	2
3. 先行研究 .....	2
3.1. 九州方言の与格と方向格 .....	2
3.2. 理論的前提となる先行研究（共時的な使い分け） .....	5
3.2.1. 名詞句階層による格選択（佐々木 2019） .....	5
3.2.2. 「移動」と「停滞」の局面による格選択（下地 2016） .....	6
3.3. 方向格の拡大過程（通時的な変化） .....	7
3.4. 先行研究と本研究の関連 .....	8
4. 調査 .....	9
4.1. 調査の目的と背景 .....	9
4.2. 調査概要 .....	9
4.2.1. 調査対象話者 .....	9
4.2.2. 調査対象となる与格の用法 .....	10
4.2.3. 調査票の変数（名詞句階層） .....	12
4.2.4. 調査票の変数（「移動」と「停滞」の局面） .....	13
4.3. 調査結果 .....	14
4.3.1. 形態的特徴 .....	14
4.3.2. 与格と方向格の基本的な使い分け .....	16
4.3.3. 与格と方向格の詳細な使い分け .....	18
5. 考察 .....	25
5.1. 仮説との比較 .....	25
5.1.1. 名詞句階層 .....	25
5.1.2. 「移動」と「停滞」の局面 .....	26
5.1.3. 方向格の拡大過程（通時的な変化） .....	27
5.1.4. その他の要因による使い分け .....	28
6. おわりに .....	30
参照文献 .....	32
付録 .....	33
グロス一覧 .....	45

## 1. はじめに

本研究の目的は、長崎県諫早市方言（以下、諫早市方言）を対象とし、与格と方向格の使い分けを詳細に記述することである。以下の例のように、与格と方向格は同じ意味役割を示すことがある。

- (1) umi{ni/san}                mukau.  
umi{=ni/=san}            mukaw-ru  
海{=DAT/=DIR}        向かう-NPST  
「海 {に/へ} 向かう。」（80代話者①）

しかし、常に与格と方向格が置き換え可能であるわけではない。(2)のように与格のみが容認される場合や、(3)のように方向格のみ容認される場合もある。

- (2) sokon            hatake{ni/\*san}            ottayo.  
soko=no        hatake{=ni/\*=san}        or-ta=yo  
そこ=GEN 畑{=DAT/\*=DIR}        いる-PST=SFP  
「(サルが) その畑にいたよ。」（80代話者①）

- (3) migi{\*ni/san}            magitte            hidarisan            itate  
migi{\*=ni/=san}        magir-te            hidari=san            itar-te  
右{\*=DAT/=DIR}        曲がる-SEQ        左=DIR            行く-SEQ  
kunsyai.  
kure-nsyar-i  
くれる-HON-IMP  
「右に曲がって、左に行ってください。」（80代話者①）

そこで、どんな場合に与格と方向格の両方が出現するのか、どんな場合に一方の格のみが出現するのかについて調べることで、与格と方向格の使い分けに関わる条件を探る必要がある。与格と方向格が置き換えられる場合には、両者の表す意味に違いが出ないかという点も記述する。さらに与格と方向格の使用について、老年層と中年層、若年層の世代間で比較を行うことで、通時的な変化の記述も試みる。

## 2. 諫早市方言について

本研究が対象とするのは、諫早市方言である。諫早市は、長崎県のほぼ中央部に位置しており、平成 17 年に 1 市 5 町（諫早市・西彼杵郡多良見町・北高来郡森山町・同郡飯盛町・同郡高来町・同郡小長井町）が合併して誕生した<sup>1</sup>。令和 4 年 12 月 1 日現在、人口は 132,375 人である<sup>2</sup>。



図 1. 長崎県諫早市の地図（黄色ハイライト部分） [KenMap Ver 9.2 を用いて筆者作成]

西島（1963: 34）は音韻やアクセント、語法、語彙などの相違と旧藩時代の行政区画を参考に、長崎県内の方言を、対馬方言・壱岐方言・平戸方言（佐世保方言を含む）・大村方言・諫早方言・島原方言・長崎（市）方言・五島方言の 8 方言区画に分けている。諫早市方言（西島 1963 では諫早方言）は、アクセントとしては甲種アクセント（二型アクセント）、方言系統としては肥筑方言系の佐賀方言系に分類される。

## 3. 先行研究

本節では、九州方言の与格と方向格の使用例を挙げつつ、両者の基本的な使い分けについて述べ、その問題点を指摘する。3.2.節では、3.1.節で見る先行研究の問題点を解決するために、他の言語体系における与格と方向格の使い分けに影響する要因を確認する。4.3.節で後述するように、これらの要因は諫早市方言においても影響している。

### 3.1. 九州方言の与格と方向格

九州諸方言の与格と方向格を扱った先行研究に神部（1984）と小林（1996）がある。こ

<sup>1</sup> 「諫早市公式ホームページ」 [諫早市紹介 | 諫早市公式ホームページ \(city.isahaya.nagasaki.jp\)](http://city.isahaya.nagasaki.jp)  
(最終アクセス日 2023 年 1 月 9 日)

<sup>2</sup> 「諫早市統計人口」 [諫早市推計人口 | 諫早市公式ホームページ \(city.isahaya.nagasaki.jp\)](http://city.isahaya.nagasaki.jp)  
(最終アクセス日 2023 年 1 月 9 日)

れらをもとに、九州方言の与格と方向格について既に知られていることを、形態と用法の面で整理する。

まず、形態に関する概観を行う。九州方言の与格の形態は「ニ」であり、異形態として「イ」や「ン」がある。方向格の形態は、肥筑地方では「サン」が優勢で、福岡・佐賀には、「サニ」「サイ」、長崎・佐賀には「サニャ」、福岡・鹿児島には「サエ」、大分西部には「サネ」などがあり、その形態と分布は複雑である（神部 1984: 62）。

次に、用法について概観する。小林（1996）によると、与格と方向格は2つの点で使い分けがあるとされる。1つ目が、「移動の目標」を標示するか「移動の目標」以外を標示するかという点である。方向格は、小林（1996: 884）において「場所や方向などの名詞を受けて、意味に移動性を含む動詞に連結するはたらきをもつこと、つまり＜移動の目標を指し示す＞」と特徴づけられている。これに当てはまるのは、(4)、(5)のような場合で、ほぼ標準語の「へ」に対応する意味的特徴を持つ。

(4) トーキョーサネ イチクデナ [小林 1996: 884]  
「東京へ行ってくるね。」（湯布院町・女性）

(5) コノミチオ キタサメ イケバ ニチナンエキニ ツクガ [小林 1996: 884]  
「この道を北に行けば日南駅に着くよ。」（日南市・男性）

しかし、移動性の動詞を用いていても、方向格が使えない場合がある。以下に示す例は、方向格は「言いにくい」（小林 1996: 885）とされ、与格が用いられる。この例で使用されている動詞「着く」は、到達点に至るまでの移動も含意しているものの、移動の着点に着目した動詞である。

(6) トーキョーニ チータ [小林 1996: 885]  
「東京に着いた。」（湯布院町・女性）

以下の例に示すように、移動性がある動詞である「行く」が述語であっても方向格が使用できない場合もある。小林（1996: 885）は、以下の例について、「完了継続の aspek の意味が加わることにより、すでに文全体が移動の表現とはとらえられていない」ために、方向格が容認されないと主張する。

(7) a. トーキョーサメ イテクルワ [小林 1996: 885]  
「東京に行ってくるよ。」（日南市・男性）

- b. トーキョー{ニ/\*サメ} イッチョットヨ [小林 1996: 885]  
「東京に行っているよ。」（日南市・男性）

上述のように、小林（1996）は(6), (7)において方向格が容認されないことを、それぞれ移動の着点に着目した表現であるため、完了継続のAspectを持ち、もはや移動の意味をもっていないためであると説明する。これは方向格が使用できない、もしくは使いにくいとされる事例に対して、個別的に説明を行っていることになる。しかし、(6), (7)において方向格が容認されないことに対し、統一的な説明を行える可能性がある。すなわち、移動に加えてその場に到着しているという意味を含意している点で、共通していると捉えることができる。例えば、(7)の例については、移動の意味を文全体が持っていないと分析するのではなく、移動に加えてその場にとどまるという結果の概念が含まれていると見ることも可能である。(6)は、小林（1996: 885）も指摘しているように、移動に加え、着点に着目していると分析することも可能である。そこで本論文では、移動に加え「停滞」という概念も用いて、方向格の使用を捉えなおす。なお、ここでいう「移動」と「停滞」の概念とは、下地（2016）によるものである。詳しくは 3.2.2.節で後述する。

以上の通り、方向格が標示するのは「移動の目標」である。一方、「移動の目標」以外を標示する場合には与格が用いられる。(8), (9)のように「移動の目的」「存在の場所」の他、「授与の相手」「出現の場所」「変化の結果」などで使用される。

- (8) シゴチ イク [小林 1996: 884]  
「仕事に行く。」（移動の目的）（湯布院町・女性）

- (9) コキ アラー [小林 1996: 884]  
「ここにあるよ。」（存在の場所）（湯布院町・女性）

使い分けの2つ目は、標示する目標地が非限定的なのか限定的なのかという点である。この基準は神部（1984: 79）が中心的に言及しており、方向格が非限定的な目標を、与格が限定的・特定の目標をそれぞれ標示し分けているという。方向格は、(10), (11)のように使用され、「～の方へ」という訳に合う。

- (10) オキサン デトツデ ナー。 [神部 1984: 63]  
「沖の方へ出ているからねえ。」（天草・女性）

- (11) タッカ ヤマノ アッチビラサン イキョッタッ パナ。 [神部 1984: 63]  
「高い山の向う側の方へ行っていたよ。」（天草・女性）

しかし、このような使い分けの基準が根底にありながらも、方向格が「帰着点」などの明らかに限定された場所を標示する場合がある（神部 1984: 70）。以下は、佐賀県で見られた例である。

(12) ナガノサン トジーテ, [神部 1984: 70]  
「長野に着いて、」（帰着点）

(13) タタミノウエサイ スワラン ネ [神部 1984: 70]  
「畳の上に座りなさいな。」（動作の行われる場所）

(14) イマ シゴトサイ イットンサッ。 [神部 1984: 70]  
「いま、仕事に行っていらっしゃる。」（動作の目的）

この神部（1984）の記述について問題点を2点述べる。1つ目が、方向格が非限定的な目標を、与格が限定的な目標を標示するという一般化は、名詞に場所をとる用法以外には当てはまらぬため、不十分なことである。2つ目が、方向格や与格が使用された例の提示方法が、列挙によることである。具体例を列挙する手法では否定証拠が得られないため、方向格が現れなかった場合をその格が容認されない場合として見なすことはできない。加えて、列挙した具体例をもとに、方向格が限定的な目標にも使用できる理由や、方向格の使用領域が拡大した過程に対する分析を示せていない。

以上をまとめると、先行研究において与格と方向格は、「移動の目標」を標示するかどうか、標示する目標が限定的なのかどうかという点で使い分けがあることが指摘されていた。一方で、その使い分けに当てはまらない場合については、具体例の列挙に留まっておき、方向格が使用可能となる理由や、方向格が使用できる用法がどのように拡大したかについての考察は不十分である。

そこで、本論文では九州方言の1つである諫早市方言において、方向格の使用を世代間で比較し、九州方言で方向格の用法の拡張が生じていることを示す。その際、3.2節に挙げる先行研究を参考にしながら、使い分けに関する条件や、方向格の使用領域が拡大する過程を明らかにする。

### 3.2. 理論的前提となる先行研究（共時的な使い分け）

#### 3.2.1. 名詞の有生性による格選択（佐々木 2019）

標準語の「に」が用いられる領域で複数の斜格助詞が区別されている方言では格助詞の使用範囲を記述する上で名詞句階層を用いた分析が有効である（佐々木 2019）。ここでの



名詞句階層とは、有生か無生かという二項対立的なものではなく、2つの極を持つ連続したスケールである。

図2は、79歳から84歳の三芳方言話者6人の複他動詞文の受け手の格標示を示したものである。1人称では、全ての話者が受け手を与格で標示した一方、花の場合は、1名の話者のみ与格標示を行っている。これを名詞句階層上の位置づけと照らし合わせると、常に与格で標示されるのは名詞句階層の有生側の極であることが分かる。このように、連続したスケールの名詞句階層を用いることで、話者間の与格の使用範囲の違いを、中心的な用法からの拡張のあり方として記述することができる。

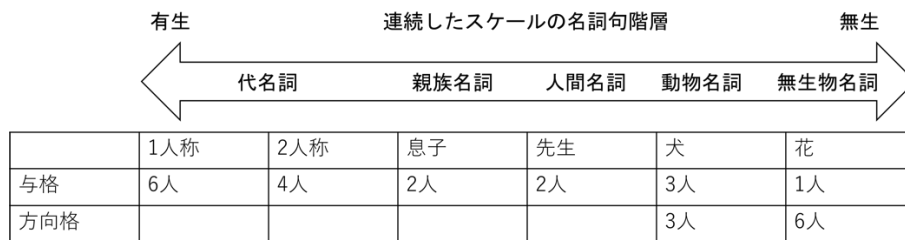


図2. 三芳方言における複他動詞文の受け手の格標示と名詞句階層  
(佐々木 2019: 表 4; 形式は筆者により一部変更)

### 3.2.2. 「移動」と「停滞」の局面による格選択 (下地 2016)

下地 (2016) では南琉球宮古伊良部長浜方言 (以下、長浜方言) の方向格と与格の交替に関して、移動動詞に関わり方向性を有するという点で区別が難しい「方向」と「着点」を、「移動」と「停滞」という概念を用いて整理している。ここでの「移動」とは動作の主要な局面が、ある場所から別の場所へ一定の距離移動している点にあるものをいい、「停滞」とは動作の主要な局面が、移動後の停滞している状態にあるものをいう (下地 2016)。この概念を用いると、「方向」と「着点」は以下のように特徴づけられる。

(15) 【着点①】 = (移動+) 停滞

【着点②】 = 移動+停滞

【方向】 = 移動

[下地 2016 (53) ]

これらの特徴を格の使用実態と照らし合わせると、心理的であれ物理的であれ移動や推移を伴う解釈が可能な場合に方向格の使用が許容されると言える。例えば(16)は「移動」の意味を含み、方向格=nkai が容認される一方、(17)は「停滞」の意味のみ含んでおり、与格=nのみ選択され方向格は使用されない。なお本論文では、「停滞」に比べ「移動」の意味が強いこと (移動>停滞) を移動の局面が大きい、「移動」に比べ「停滞」の意味が強いこと (移動<停滞) を移動の局面が小さいと記述する。

(16) banti=ga uja=a mmja pai=nkai=du parii njaan.  
 私たち=の 父=は もう 畑=ALL=FOC 出発して しまった  
 「私たちの父はもう畑に出発してしまった。」 【方向】 [下地 2016 (48) ]

(17) ica=u jaa=nu pana=n=du ncitar.  
 板=を 家=の 屋根=DAT=FOC 置いた  
 「板を家の屋根に置いた」 【着点①】 [下地 2016 (42a) ]

### 3.3. 方向格の拡大過程（通時的な変化）

小林（1997: 103）は、九州方言の方向格が用法を拡大していない一方で、東北方言の方向格は用法を拡大していったことを指摘する。

東北方言における方向格の用法の拡大については、小林（1994）に記述がある。図3にその拡大過程を示す。方向格は「移動の目標」や「帰着点」が中心的な用法であり、方向性と移動性という条件の中で「出現の場所」や「存在の場所」にも使用されるようになった。さらに移動性という条件を捨て、対象への方向性のみ維持することで「変化の結果」や「時」「心的態度の相手」「使役の相手」などにも使用されるようになったと言える。なお小林（1994）は東北方言における方向格の用法を記述する際に、「移動の目標」と「移動の帰着点」という用法を設定している。「移動の帰着点」は、移動の過程よりも帰着点そのものに焦点があるという点で、「移動の目標」とは区別されるという（小林 1994: 241）。この基準は3.2.2節で言及した下地（2016）の「移動」と「停滞」の概念に類似しており、これらを用いることでより客観的に用法の特徴づけができる可能性がある。

東北方言におけるサの用法の発達過程

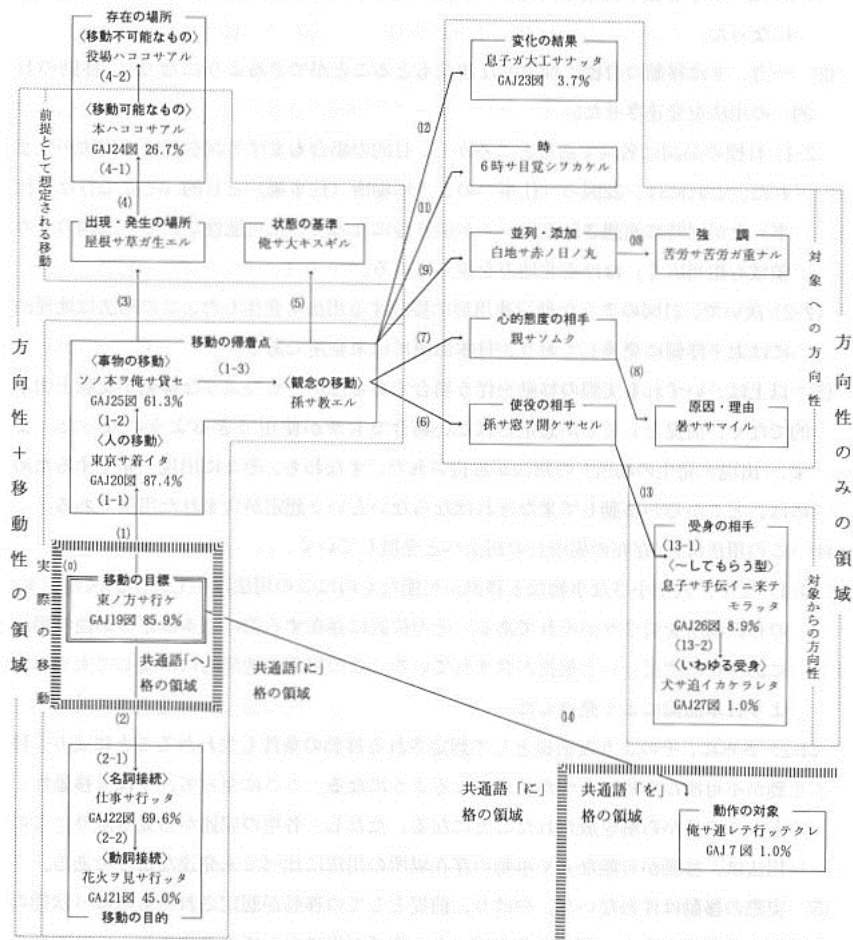


図 3. 東北方言における方向格の発達過程 (小林 1994: 222)

### 3.4. 先行研究と本研究の関連

九州方言の方向格は、「移動の目標」を標示する用法が中心であり、標準語の「へ」の意味領域に留まっていると指摘されていた (小林 1996: 882)。「移動の目標」以外で方向格が使える場合に関しては、具体例を列挙するのみで、方向格の拡大の過程や方向格が容認される理由を示せていない。

そこで上記の問題点を解決するため、本論文では、「移動」と「停滞」の局面 (下地 2016) や名詞句階層上の位置づけ (佐々木 2019) という観点を導入し、網羅的な調査を行うとともに、その結果を世代間で比較する。加えて、東北方言 (小林 1994) を参考に、九州方言における方向格の用法の拡大に順序を示せるかどうかについても検討する。記述には、否定証拠を明示することとする。

## 4. 調査

4.1.節で調査の目的と背景、4.2.節で調査概要、4.3.節で調査結果について言及する。

### 4.1. 調査の目的と背景

本論文で明らかにしたいことは、与格と方向格の使い分けである。そのために、与格が表す用法を基準に方向格の用法の広がりを確認するという方法をとった。調査にあたり、以下に示す仮説を立てた。

(18) 与格と方向格の選好には、世代差が関わる。

(19) 与格と方向格の選好には名詞の有生性が関わる。名詞の有生性が関わる場合、階層が下位の名詞ほど方向格を取りやすい。

(20) 与格と方向格の選好には、「移動」と「停滞」の局面が関わる。「移動」と「停滞」の局面が関わる場合、「移動」の局面が大きいほど（移動>停滞）方向格を取りやすい。

仮説の根拠を示す。まず仮説(18)に関しては、話者の「サン」は老年層の中でも田舎暮らしが長い人が使用しており、中年層や若年層で使用する人は少ないのではないかと、という内省に加え、神部（1984: 70）の、若年層が限定的な場所を標示するのに方向格を使用した場合があったという指摘から、方向格の使用に世代差があると考えた。仮説(19)に関しては、佐々木（2019）である用法における与格の使用範囲と名詞句階層上の位置づけとの関連が指摘されていたことによる。仮説(20)に関しては、下地（2016）の心理的であれ物理的であれ、移動や推移を伴う解釈が可能な場合に方向格の使用が許容されるという指摘が、諫早市方言にも当てはまるのではないかと考えたためである。

### 4.2. 調査概要

以下では、調査対象話者、調査対象の範囲となる与格の用法、調査票に用いた変数について述べる。

#### 4.2.1. 調査対象話者

調査協力者を表1に示す。本論文では、方向格を日常的に使っている30代から80代の話者4名と、自分では方向格を使用しないものの祖父母や両親が使用しているため内省の判断ができる20代話者1名に協力を依頼した。調査手段は、対面または電話での調査票を用いた調査である。80代の話者に関しては、1名には網羅的に調査を行っているが、も

う1名には網羅的な調査を行っておらず、日高（2009）に掲載されている調査票の事項のみ調査を行っている。幅広い世代の話者を対象とした理由は、与格と方向格の選好に世代差が関わっているかどうかを調べるためである。

表 1. 調査対象話者情報

年齢	80代①	80代②	60代	30代	20代
外住歴	なし	なし	なし	20代から 大村市	なし

#### 4.2.2. 調査対象となる与格の用法

この節では、調査対象となる用法について述べる。調査は与格が表す用法のうちどの用法を方向格に置き換えることが可能かという点から行ったため、与格が表す用法を定義する必要がある。そこで本論文では日高（2009）の表1「現代日本語の格助詞の意味・用法」における助詞「ニ」の項目と、日本語記述文法研究会（編）（2009）の定義を用いることとする。具体的な用法と定義、調査例文を表2に示す。なお「出現の場所」「感情・感覚の起因」「継続状態の起因」に関しては話者が回答しやすい例文に改変している。

表 2. 与格の用法と定義

格の意味	用法の詳細	定義	調査例文
相手	向かう相手 <sup>3</sup>	動作が向かう先としての相手。動詞は「話しかける」「電話をかける」「吠える」など。	隣の人に話しかける。
	授与の相手	物のやり取りにおける受け手として相手。動詞は「やる」「あげる」「贈る」「貸す」など。	おばあさんが孫に絵本をやる。
	受身的動作の相手	主体が何らかの行為や影響を受ける際の相手。動詞は「捕まる」「もらう」「教わる」など。	孫がおばあさんに本をもらった。
	引き合いにする相手 <sup>4</sup>	主体を述べるための基準となる相手。動詞は「まさる」「劣る」「受賞する」など。	大人に体格が勝る。
対象	動きの対象 <sup>5</sup>	主体が行う動作が向けられるものの、そ	親にさからう。

<sup>3</sup> 日本語記述文法研究会（編）（2009: 46）「動作の相手」の項目を参照した。

<sup>4</sup> 日本語記述文法研究会（編）（2009: 46）「基準としての相手」の項目を参照した。

<sup>5</sup> 日本語記述文法研究会（編）（2009: 41）「動作の対象」の項目を参照した。

		のものには変化が生じない存在としての対象。動詞は「逆らう」「はむかう」など。	(対峙する対象)
		思考活動や感情の動きが向けられる対象。動詞は「あこがれる」「飽きる」など。	先輩にあこがれる。(心的活動の対象)
着点	移動の着点	事物がある位置から別の位置へと移動するときの移動先である到達点を表す。動詞は「行く」「着く」「落ちる」「向かう」など位置変化を表す自動詞。	子どもが学校に行く。(到達点)
		事物が外部から移動し、ある場所に接触する場合の移動先である接触点を表す。動詞は「つく」「触る」など接触を意味する自動詞。	糸くずが服に付く。(接触点)
	変化の結果	主体の変化後の状態を表す。動詞は「変わる」「育つ」「なる」などの自動詞。	信号が青に変わる。
場所	存在の場所	事物が存在する場所。動詞は「ある」「いる」「存在する」など。	机の上に本がある。
	出現の場所	事物がある場所の内部で発生し、存在するようになる場所。	サルが畑に現れる。
主体	状態の主体	ある対象の持ち主としての主体。動詞は「ある」「いる」「ない」など。	私には大きな夢がある。(所有の主体)
		能力や知覚状態の持ち主としての主体。動詞は可能動詞や「見える」「聞こえる」など。	私にはこんな難しい本は読めない。(能力の主体)
		ある知覚、感情、感覚が成り立つ存在としての主体。	私にはそれが不思議でならない。 (心的状態の主体)
手段	内容物	具体的・抽象的な器の中に満たされる存在としての事物。接続する名詞は物質や感情で、動詞は「満たされる」など。	新入生の顔は希望にあふれている。
	付着物	物に接触しくつつくもの。接続する名詞	全身が泥にまみ

		は物質を、動詞は物質による主体の状態変化を表す。	れる。
起因・根拠	感情・感覚の起因	感情・感覚など精神的・生理的な状態や変化を表す述語とともに用いられ、その状態あるいは変化をもたらす起因を表す。	寒さに震える。
	継続状態の起因	述語が継続する自然現象を表す場合に、その現象の起因を表す。	木が強風にしなる。
時	時点	発話時とは関わりなく、絶対的に指し示す時点。	1時に事務所に来てください。 (時名詞)
		その期間の一時点。ある動作と事態が起きることを表す。	午前中に宅急便が届いた。(期間名詞)
目的	移動の目的	述語で表される動作を行うことによる達成される事態。動作性名詞と、移動を表す述語を用いる。	父は日曜日にも仕事に行く。
役割		述語で表される事態の成立にあたっての、主体や対象が担う働き。「に」は述語で表される行為に対し、その行為の意味を明示する名詞につく。	お礼に手紙を書く。
割合		期間や数量など一定数を基準とし、ほかのものの多寡を相対的に表したもの。期間や数量など基準となる単位につき、そのうちの部分を直後に続けて表す。	1週間に2日は酒を飲んでい

#### 4.2.3. 調査票の変数（名詞の有生性）

この節では、調査で変数として使用した名詞の有生性について述べる。名詞句階層は角田（2009: 41）を参考にし、使用する名詞を有生の極から順に1人称、2人称、3人称、親族名詞・固有名詞、人間名詞、動物名詞、無生物名詞とした。調査対象となる用法は表2で方向格が使用された用法である。ただし、「移動の着点<sup>6</sup>」「場所」「移動の目的」は、名詞の有生性を変数に取れないため調査対象外とした。調査票は本論文末尾にその結果と

<sup>6</sup> 用法の名称は、表2の「用法の詳細」の欄に記載されている名称で表記し、無い場合は「格の意味」の欄に記載されている名称で表記する。

ともに添付する。

#### 4.2.4. 調査票の変数（「移動」と「停滞」の局面）

この節では、調査で変数として使用した「移動」と「停滞」の局面について述べる。これは下地（2016）を参考にしており、本論文においては、局面の違いを、意味的な違いまたは動詞の違いによって表した。局面の違いを意味的な違いで表したのは、「移動の着点」「変化の結果」である。以下は、意味的な違いによるミニマルペアであり、(21a)に比べ(21b)がより離れた位置から着点に至る解釈ができる。

(21) a. 野菜を鍋に入れる。

b. 火が怖いので遠くから野菜を鍋に入れる。

局面の違いを動詞の違いで表したのは、「移動の着点」「授与の相手」である。表3は調査で使用した動詞と、それらの動詞がどの局面を表しているかを示している。「移動の着点」を例に見ると、移動に意味の中心がある動詞として「向かう」「曲がる」を、移動と停滞の両方の意味を含む動詞として「捨てる」「入れる」を、移動後の停滞に意味の中心がある動詞として「乗る」「座る」を用いた。「授与の相手」では、移動に意味の中心がある動詞として「送る」を、停滞に意味の中心がある動詞として「あげる」を使用した。「送る」を移動に意味の中心がある動詞とした理由は、日本語の授与動詞「与える」に対して、「送る」では単なる移動だけが含意されているという、下地（2016）の指摘による（下地（2016）は Kishimoto（2001）の指摘を引用している）。

表 3. 動詞が表す「移動」と「停滞」の局面

動詞が表す局面/用法	移動の着点	授与の相手
「移動」のみ	「向かう」「曲がる」	「送る」
「移動」と「停滞」	「捨てる」「入れる」	
「停滞」のみ	「乗る」「座る」	「あげる」

さらに「存在の場所」と「出現の場所」は、「場所」を表すという点では同じ用法だが、移動の局面に差があるミニマルペアとして扱う。移動の局面に差があるとした理由は、小林（1994: 221）の、「出現の場所」は出現するためにどこからか移動してこなければならないという想定が含まれているとの指摘による。調査対象は、表2で方向格が使用された用法のうち、以上に見てきた「移動の着点」「変化の結果」「授与の相手」「存在の場所」「出現の場所」である。「向かう相手」と「移動の目的」は、移動の局面を変数に取れな



いため調査対象外とした。調査票は本論文末尾にその結果とともに添付する。

### 4.3. 調査結果

調査結果について、4.3.1.節で形態的特徴を、4.3.2.節と 4.3.3.節で意味的特徴を述べる。

#### 4.3.1. 形態的特徴

諫早市方言では、与格に=ni, =n, =i という異形態がある。多くの場合、=ni の形態が使用される。

- (22) a. oyani oya=ni 親に  
b. senpaini senpai=ni 先輩に  
c. basuni basu=ni バスに  
d. hatakeni hatake=ni 畑に  
e. magoni mago=ni 孫に

与格が=n の形態で現れたのは、次に示す 60 代話者の 1 例のみである。60 代話者で「バス」以外に=n が後続する例は無く、他の世代でも出現することは無かった。

- (23) basun basu=n バスに

与格が=i の形態で現れることもある。全ての母音に後続する例を見た結果、=i の形式が出てかつ母音融合が生じるのは、以下に示すような、指示・疑問場所名詞に後続する場合のみであり、80 代話者にしか見られない。

- (24) a. soke soko=i そこに  
b. doke doko=i どこに  
c. koke koko=i ここに

なお、指示・疑問代名詞以外の例に関して、通時的に名詞化接辞-sa と与格=i に由来すると考えられる syaa という形式がある。この形式は、80 代の話者に見られる。以下に、例を示す。

- (25) hiyasyaa hurueta.  
hiya-syaa hurue-ta  
寒い-CSL 震える-PST

「寒くて震える。」（感情・感覚の起因）（80代話者①）

この形式が名詞化接辞-sa と与格助詞=i に由来すると考えられるのは、諫早市方言では ai という連母音は yaa という音に交替し、さらに、周辺方言を見ると、ai が ee に交替する福岡県柳川市方言において、同様の機能を担う形式が takase noboraren 「高くて登れない」のように se という形式で現れる（松岡葵, p.c.）からである。ただし、本論文では、諫早市方言においてこの形式を共時的には 1 形態素-syaa であると分析し、名詞化接辞と与格助詞の 2 形態素から成るとは分析しない。これは、以下の 2 点の理由による。1 点目に、指示・疑問代名詞に後続する=i は=ni と置き換え可能であるのに対し、この例に関しては=ni との置き換えが不可能である。2 点目に、当該形式は話者の中でもひとまとまりだという意識があり、「シャーは「～で」を表す感じで、感情や体調などが理由のときに使う表現。他に「かなっしゃー、泣きよる（悲しくて泣いている）」「具合のわるしゃー、元気のなかね（具合が悪くて、元気がないね）」のような使い方をする。」という内省があるためである。そのため、本論文では-syaa 全体を 1 形態素と見なすこととする。本稿は-syaa という形式が共時的に与格を含むとは分析しないため、以下でも考察の対象外とする。

方向格の標示には=san を用いる。

(26) gakkoo<sub>san</sub>    gakkoo=<sub>san</sub>    学校に  
      hatakesan    hatake=<sub>san</sub>    畑に  
      migisan      migi=<sub>san</sub>      右に

与格と方向格の他に、=si という形式も使用された。話者の内省によると=s<sub>i</sub> は、「横シ」の形でのみ使い、「縦シ」や「ななめシ」とは言わないという。調査結果でも、「横」以外に=s<sub>i</sub> が後続する例は見られなかった。この=s<sub>i</sub> は、詳細な機能が不明であるため、グロスは?で表記する。

(27) yoko{<sub>ni/san/si</sub>}      nattotta.  
      yoko{=<sub>ni/=san/=si</sub>}    nar-tor-ta  
      横{=<sub>DAT/=DIR/=?</sub>}    なる-PF-PST  
      「（木が倒れて）横になっていた。」（80代話者①）

(28) yoko{<sub>ni/san/si</sub>}      yatte                    kunsyai.  
      yoko{=<sub>ni/=san/=si</sub>}    yar-te                    kure-nsya-i  
      横{=<sub>DAT/=DIR/=?</sub>}    やる-SEQ                くれる-HON-IMP  
      「（木の棒を）横にやってください。」（80代話者①）

- (29) yoko{ni/san/si} ut-taoreta.  
 yoko{=ni/=san/=si} ut-taore-ta  
 横{=DAT/=DIR/=?} EMP-倒れる -PST  
 「(木が) 横に倒れた。」 (80 代話者②)

#### 4.3.2. 与格と方向格の基本的な使い分け

4.3.2.節では、与格と方向格の基本的な使い分けを把握する。4.3.3.節では、4.3.2.節で方向格が使用された用法、すなわち D/A 類と \*D/A 類に対し変数を設定することで、詳細な使い分けを見る。そして与格と方向格の使い分けに関する結果として、以下のことを示す。

(30) 世代差は、方向格が使用できる用法の範囲に違いをもたらす。80 代の話者に比べ 60 代以下の話者では使用範囲が拡大している。「移動の着点（到達点）」は全世代で方向格を使用できる。

(31) 名詞の有生性は、「授与の相手」「変化の結果」「向かう相手」における与格と方向格の使い分けに関わっている。「授与の相手」と「変化の結果」においては、名詞句階層の下位の名詞ほど方向格を取りやすい。

(32) 移動の局面は、「移動の着点」における与格と方向格の使い分けに関わっており、方向格は移動の局面が大きいほど容認されやすい。

与格と方向格の基本的な使用状況を表 4 に示す。回答に関して、30 代から 80 代の話者は、自分が与格または方向格を使用する場合を容認可能、自分では使用しない場合を容認不可とした。20 代の話者は、他人が与格または方向格を使用したときに違和感が無い場合を容認可能、違和感があれば容認不可とした。表の表記に関して、\*D/\*A は与格も方向格も容認されなかった用法、D/\*A は与格のみ容認された用法、D/A は与格も方向格も容認された用法、\*D/A は方向格のみ容認された用法である。回答を類別に見ていく。

まず \*D/\*A 類（与格も方向格も容認されなかった用法）は、30 代から 80 代における「引き合いにする相手」「状態の主体（所有の主体）」「状態の主体（能力の主体）」「状態の主体（心的状態の主体）」「内容物」「感情・感覚の起因」「継続状態の起因」で見られた。話者によると、標準語のような硬い表現のため使いにくいとの回答だった。本論文は与格と方向格を対象にするため、両方が使用されなかったこれらの用法は、考察の対象外とする。

次に、D/\*A 類（与格のみ容認された用法）は多くの部分で見られたものの、全世代で

共通して D/\*A 類が見られたのは「受身的動作の相手」「動きの対象（対峙する対象）」「動きの対象（心的活動の対象）」「時」「役割」「割合」である。これらは与格の中心的な用法であると考えたため、変数を設定した調査を行っていない。この点は今後の課題として 6 章で述べる。

D/A 類（与格も方向格も容認された用法）は、20 代から 60 代における「向かう相手」「授与の相手」「移動の着点（到達点）」「移動の着点（接触点）」「存在の場所」「出現の場所」「付着物」「移動の目的」で見られた。

\*D/A 類（方向格のみ容認された用法）は、80 代の「移動の着点（到達点）」でのみ見られた。

以上より、方向格は「移動の着点（到達点）」で用いられやすく、80 代の話者に比べ 60 代以下の話者では使用範囲が拡大していることが分かった。

表 4. 与格と方向格の世代別使用概観

格の意味	用法の詳細	80 代①	80 代②	60 代	30 代	20 代
相手	向かう相手	D/*A	D/*A	D/*A	D/A	D/A
	授与の相手	D/*A	D/*A	D/*A	D/A	D/*A
	受身的動作の相手	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A
	引き合いにする相手	*D/*A	*D/*A	*D/*A	*D/*A	D/*A
対象	動きの対象（対峙する対象）	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A
	動きの対象（心的活動の対象）	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A
着点	移動の着点（到達点）	*D/A	*D/A	D/A	D/A	D/A
	移動の着点（接触点）	D/*A	D/*A	D/A	D/*A	D/*A
	変化の結果	D/*A	D/*A	D/*A	D/A	D/A
場所	存在の場所	D/*A	D/*A	D/*A	D/A	D/*A
	出現の場所	D/*A	D/*A	D/A	D/A	D/A
主体	状態の主体（所有の主体）	*D/*A	*D/*A	*D/*A	*D/*A	D/*A
	状態の主体（能力の主体）	*D/*A	*D/*A	*D/*A	*D/*A	D/*A
	状態の主体（心的状態の主体）	*D/*A	*D/*A	*D/*A	*D/*A	D/*A
手段	内容物	*D/*A	*D/*A	*D/*A	*D/*A	D/*A
	付着物	*D/*A	*D/*A	*D/*A	D/*A	D/A
起因・根拠	感情・感覚の起因	*D/*A	*D/*A	*D/*A	D/*A	D/*A
	継続状態の起因	D/*A	*D/*A	*D/*A	D/*A	D/*A
時	時点（時名詞）	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A
	時点（期間名詞）	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A

目的	移動の目的	D/*A	D/*A	D/A	D/A	D/A
役割		D/*A	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A
割合		D/*A	D/*A	D/*A	D/*A	D/*A

これらの用法の他、九州方言では形容詞経験者構文に与格が使用される場合がある。形容詞経験者構文とは、松岡（2019: 1）では「知覚イベントを表す形容詞を述語にとり、意味役割として経験者と刺激を項にとる。例えば「私は先生が怖い」のような文である」と定義されている。しかし今回の調査では全世代主格標示の回答のみが得られ、与格標示は容認されなかった。

#### 4.3.3. 与格と方向格の詳細な使い分け

4.3.3.節では、方向格が使用された D/A 類と \*D/A 類、すなわち「向かう相手」「授与の相手」「移動の着点」「場所」「移動の目的」に関して、用法ごとに変数を設定して調査を行った結果を示す。なお「付着物」は、80代や60代の話者において、標準語的な表現で与格や方向格を使用しにくいとの回答が得られたため調査を行っていない。

以下では用法別に使い分けに関する条件を見ていく。

まず「向かう相手」に関して、名詞の有生性の観点から記述を行う。結果は表5に示す。80代と20代は、名詞の有生性に関わらず方向格を使用することができなかった。ただし20代は5.1.4.節で後述するように、文脈によっては方向格が容認されるようになる。60代は、以下に示すように無生物名詞でのみ方向格を使用できた。

- (33) gakkoo{ni/san} kiita.  
gakkoo{=ni/=san} kik-ta  
学校{=DAT/=DIR} 聞く -PST  
「学校に聞いた。」（無生物名詞）（60代話者）

30代は、親族名詞と無生物名詞で方向格が使用できた一方、人間名詞と動物名詞で方向格が使用できなかった。名詞の有生性によって容認度は変化した。方向格の容認度に階層の順は関係していなかった。

- (34) a. mago{ni/san} kiite miru.  
mago{=ni/=san} kik-te mi-ru  
孫{=DAT/=DIR} 聞く -SEQ 見る -NPST  
「孫に聞いてみる。」（親族名詞）（30代話者）

- b. sensei{ni/\*san} kiku.  
 sensei{=ni/\*=san} kik-ru  
 先生{=DAT/\*=DIR} 聞く -NPST  
 「先生に聞く。」（人間名詞）（30 代話者）
- c. neko{ni/\*san} kiku.  
 neko{=ni/\*=san} kik-ru  
 猫{=DAT/\*=DIR} 聞く -NPST  
 「猫に聞く。」（動物名詞）（30 代話者）
- d. gakoo{ni/san} kikanba.  
 gakkoo{=ni/=san} kik-a-nba  
 学校{=DAT/=DIR} 聞く -THM-OBL  
 「学校に聞かなければ。」（無生物名詞）（30 代話者）

なお移動の局面の観点からは調査を行っていない。「向かう相手」は、対象がある着点に到達するような解釈が成り立たない一方、行為が必ず聞き手に向けられている点で方向性を有している（下地 2016）。そのため移動の局面を変数として設定することができない。

表 5. 「向かう相手」における名詞句階層と方向格の使用

名詞	調査例文	80代	60代	30代	20代
1人称					
2人称	あなたに聞く。	×	×	×	×
3人称	彼に聞く。	×	×	×	×
親族名詞	孫に聞く。	×	×	○	×
人間名詞	先生に聞く。	×	×	×	×
動物名詞	猫に聞く。	×	×	×	×
無生物名詞	学校に聞く。	×	○	○	×

「授与の相手」に関する結果を表 6 に示す。表中の a は移動の局面が小さい設定、b は移動の局面が大きい設定である。まず、移動の局面が小さい a に注目し、名詞の有生性の観点から記述を行う。80 代と 20 代では、名詞の有生性に関わらず方向格を使用することができなかった。60 代は、以下に示すように無生物名詞でのみ方向格を使用できた。

- (35) honba gakkoo{ni/san} {ageta/ yatta}.  
 hon=ba gakkoo{=ni/=san} {age-ta/ yar-ta}  
 本=ACC 学校{=DAT/=DIR} {あげる-PST/ やる-PST}  
 「本を学校にあげた/やった。」（無生物名詞）（60 代話者）

30代は、2人称と3人称で方向格が使用できなかった一方、親族名詞と人間名詞、無生物名詞で方向格が使用できた。名詞の有生性によって容認度が変化し、方向格の容認度に階層の順が関係していた。

次に、aとbを比較することで移動の局面の観点から記述を行う。80代は、以下に示すように無生物名詞において移動の局面が大きい方で方向格を使用できた。60代30代と20代は、移動の局面によって方向格の容認度は変化しなかった。

- (36) a. gakkoo{ni/\*san} honba yatta.  
 gakkoo{=ni/\*=san} hon=ba yar-ta  
 学校{=DAT/\*=DIR} 本=ACC やる-PST  
 「学校に本をやった。」（無生物名詞）（80 代話者）

- b. gakkoo{ni/san} okutta.  
 gakkoo{=ni/=san} okur-ta  
 学校{=DAT/=DIR} 送る-PST  
 「（本を）学校に送った。」（無生物名詞）（80 代話者）

表 6. 「授与の相手」における名詞句階層と移動の局面による方向格の使用

名詞	調査例文	80代	60代	30代	20代
2人称	a. あなたに本をあげる。	×	×	×	×
	b. あなたに本を送る。	×	×	×	×
3人称	a. 彼に本をあげる。	×	×	×	×
	b. 彼に本を送る。	×	×	×	×
親族名詞	a. 孫に本をあげる。	×	×	○	×
	b. 孫に本を送る。	×	×	○	×
人間名詞	a. 先生に本をあげる。	×	×	○	×
	b. 先生に本を送る。	×	×	○	×
無生物名詞	a. 学校に本をあげる。	×	○	○	×
	b. 学校に本を送る。	○	○	○	×

「移動の着点」に関して、移動の局面の観点から記述を行う。結果は表7に示し、表中の a は移動の局面が小さい設定、b は移動の局面が大きい設定である。まず全世代に共通する結果を見ると、移動に意味の中心がある動詞（「向かう」「曲がる」）の場合は、方向格を使用できた。次に世代別の結果を見ると、80代は、移動の局面の大きさに関わらず方向格の容認度が変化しないか、移動の局面が大きい方だけ方向格が容認されるかのいずれかである。(37)は移動の局面の大きさに関わらず方向格が使用される場合、(38)は移動の局面の大きさに関わらず方向格が使用されない場合、(39)は移動の局面が大きい(39b)のみ方向格が容認された場合である。

(37) a. gomibako{ni/san} suteta.  
 gomibako{=ni/=san} sute-ta  
 ごみ箱{=DAT/=DIR} 捨てる-PST  
 「(ごみを)ごみ箱に捨てた。」(80代話者)

b. donda{ni/san} suteta.  
 donda{=ni/=san} sute-ta  
 崖{=DAT/=DIR} 捨てる-PST  
 「(ごみを)崖に捨てた。」(80代話者)

(38) a. nabe{ni/\*san} ireta.  
 nabe{=ni/\*=san} ire-ta  
 なべ{=DAT/\*=DIR} 入れる-PST  
 「(野菜を)鍋に入れた。」(80代話者)

b. nabe{ni/\*san} ireta.  
 nabe{=ni/\*=san} ire-ta  
 なべ{=DAT/\*=DIR} 入れる-PST  
 「(火が怖くて遠くから野菜を)鍋に入れた。」(80代話者)

(39) a. basu{ni/\*san} notte iku.  
 basu{=ni/\*=san} nor-te ik-ru  
 バス{=DAT/\*=DIR} 乗る-SEQ 行く-NPST  
 「バスに乗っていく。」(80代話者)



- b. yatto basu{ni/san} nottabai.  
 yatto basu{=ni/=san} nor-ta=bai  
 やっと バス{=DAT/=DIR} 乗る-PST=SFP

「(長時間並んだ状況で) やっとバスに乗ったよ。」 (80代話者)

60代と20代は、移動の局面の大きさに関わらず方向格が容認されるか、移動の局面が大きい方が容認される。30代は、移動の局面の大きさに関わらず全て方向格が容認された。なお名詞の有生性の観点からは調査を行っていない。「移動の着点」を表す名詞は場所的な性質をもつ(日本語記述文法研究会(編)2009)。そのため名詞の有生性を変数として設定することができない。

表7. 「移動の着点」における移動の局面と方向格の使用

動詞の意味	調査例文	80代	60代	30代	20代
移動+, 停滞-	海に向かう。	○	○	○	○
	右に曲がる。	○	○	○	○
移動+, 停滞+	a. ごみをごみ箱に捨てる。	○	×	○	○
	b. ごみを崖に捨てる。	○	○	○	○
	a. 野菜を鍋に入れる。	×	×	○	×
	b. 火が怖いので遠くから野菜を鍋に入れる。	×	○	○	○
移動-, 停滞+	a. 荷物を玄関に置く。	×	○	○	×
	b. 車の中の荷物を運んで家の机に置く。	×	○	○	○
	a. バスに乗る。	×	×	○	○
	b. 長時間並んだ末バスに乗る。	○	○	○	○

「変化の結果」に関する結果を表8に示す。表中のaは移動の局面が小さい設定、bは移動の局面が大きい設定である。まず移動の局面が小さいaに注目し、名詞句階層の観点から記述を行う。80代と60代は、名詞の有生性に関わらず方向格を使用することができなかった。30代は親族名詞で方向格が使用できなかった一方、人間名詞と無生物名詞で方向格が使用できた。20代は親族名詞と人間名詞で方向格が使用できなかったが、無生物名詞では使用できた。30代と20代では、名詞の有生性によって容認度が変化し、方向格の容認度に階層の順が関係していた。

次にaとbを比較することで移動の局面の観点から記述を行う。80代は、移動の局面に関わらず方向格を使用することができなかった。60代は、以下に示すように人間名詞と無生物名詞において、移動の局面が大きい(40b), (41b)で方向格を使用することができた。

- (40) a sensei{ni/\*san} natta.  
 sensei{=ni/\*=san} nar-ta  
 先生{=DAT/\*=DIR} なる-PST  
 「先生になった。」 (人間名詞) (60代話者)
- b sensei{ni/san} nattatoyamonne.  
 sensei{=ni/=san} nar-ta=to=yar-ru=mon=ne  
 先生{=DAT/\*=DIR} なる-PST=FMN=COP-NPST=SFP=SFP  
 「(苦勞してようやく) 先生になったんだもんね。」 (人間名詞) (60代話者)
- (41) a. ao{ni/\*san} kawatta.  
 ao{=ni/\*=san} kawar-ta  
 青{=DAT/\*=DIR} 変わる-PST  
 「(信号が) 青に変わった。」 (無生物名詞) (60代話者)
- b. yatto ao{ni/san} natta.  
 yatto ao{=ni/=san} nar-ta  
 やっと 青{=DAT/=DIR} なる-PST  
 「(信号が) やっと青になった。」 (無生物名詞) (60代話者)

30代と20代は、移動の局面によって方向格の容認度は変化しなかった。

表 8. 「変化の結果」における名詞句階層と移動の局面による方向格の使用

名詞	調査例文	80代	60代	30代	20代
親族名詞	a. 母になった。	×	×	×	×
	b. やっとのことで母になった。	×	×	×	×
人間名詞	a. 先生になった。	×	×	○	×
	b. やっとのことで先生になった。	×	○	○	×
無生物名詞	a. 信号が青になった。	×	×	○	○
	b. 信号がやっと青になった。	×	○	○	○

「存在の場所」と「出現の場所」に関しては、場所が限定的か非限定的かという点から調査を行った。この変数は、神部 (1984: 79) の、方向格が非限定的な目標を、与格が限定

的な目標をそれぞれ標示し分けているという指摘に基づいたものである。結果は表 9 と表 10 に示す。まず「存在の場所」について、80代は場所が限定的かどうかに関わらず方向格を使用することができなかった。60代は場所が限定的かどうかに関わらず方向格を使用でき、動詞との関係では「ある」より「いる」の方が方向格を用いやすいという話者の内省が得られた。30代と20代は、動詞「ある」の場合、非限定的な場所にも方向格が使用でき、動詞「いる」の場合、場所が限定的かどうかに関わらず方向格を使用することができる。

表 9. 「存在の場所」における方向格の使用

場所	調査例文	80代	60代	30代	20代
限定的	鎌はここに <sup>に</sup> ある。	×	○	×	×
非限定的	鎌は畑に <sup>に</sup> ある。	×	○	○	○
限定的	サルがここに <sup>に</sup> いた。	×	○	○	○
非限定的	サルが畑に <sup>に</sup> いた。	×	○	○	○

次に「出現の場所」について、80代は場所が限定的かどうかに関わらず方向格を使用することができなかった。60代は場所が限定的かどうかに関わらず方向格を使用できるが、「ここ」や「そこ」など場所を特定したいときの方が方向格を用いやすいという回答が得られた。30代は非限定的な場所にも方向格が使用できる。20代は場所が限定的かどうかに関わらず方向格を使用することができる。以上の結果より、場所が限定的なのか、非限定的なのかという違いは、方向格の容認度に影響を与える場合がある。

表 10. 「出現の場所」における方向格の使用

場所	調査例文	80代	60代	30代	20代
限定的	サルがここに <sup>に</sup> 現れた。	×	○	×	○
非限定的	サルが畑に <sup>に</sup> 現れた。	×	○	○	○

最後に、「存在の場所」における「いる」の結果と「出現の場所」における「現れる」の結果を比較し、移動の局面の観点から記述を行う。80代は、移動の局面に関わらず方向格を使用することができなかった。60代と20代は、移動の局面に関わらず方向格を使用できた。30代は、以下に示すように移動の局面が小さい(42a)だけ方向格が容認された。なお名詞句階層の観点からは調査を行っていない。「場所」は事態が成立する位置のことである(日本語記述文法研究会(編)2009)。そのため名詞の有生性を変数として設定することができない。

(42) a. koko{ni/san}                   ottayo.  
 koko{=ni/=san}                   or-ta=yo  
 ここ{=DAT/=DIR}                おる-PST=SFP  
 「(サルが) ここにいたよ。」 (30代話者)

b. koko{ni/\*san}                   detayo.  
 koko{=ni/\*=san}                   de-ta=yo  
 ここ{=DAT/\*=DIR}                出る-PST=SFP  
 「(サルが) ここに出たよ。」 (30代話者)

「移動の目的」に関しては、与格が連用形に接続するか、動名詞に接続するかという点から調査を行った。この変数は、小林(1994: 221)で、東北方言の方向格において、接続の形によって発達過程に順序が生じていたことによる。結果は表 11 に示す。80代と60代では、接続の形に関わらず方向格を使用することができなかった。ただし60代は5.1.4.節で後述するように、文脈によっては方向格が容認されるようになる。30代は動名詞接続の場合に方向格を使用することができる。20代は連用形接続の場合も動名詞接続の場合もともに方向格が使用できた。以上の結果より、接続の形が、方向格の容認度に影響を与える場合がある。

表 11. 「移動の目的」における接続形と方向格の使用

接続の形	調査例文	80代	60代	30代	20代
連用形接続	遊びに行く。	×	×	×	○
動名詞接続	仕事に行く。	×	×	○	○

## 5. 考察

### 5.1. 仮説との比較

#### 5.1.1. 名詞句階層

与格と方向格の選好には名詞の有生性が関わることと、名詞句階層の下位ほど方向格を取りやすいという仮説を立て、名詞の有生性を変数にした調査を行った。その結果、名詞の有生性は「授与の相手」「変化の結果」「向かう相手」における与格と方向格の使い分けに関わっていた。加えて「授与の相手」と「変化の結果」においては、階層が下位の名詞ほど方向格を取りやすい結果となった。すなわち、ある名詞で方向格が使用できた場合、それより下位の階層にある名詞は全て方向格を取ることができた。一方「向かう相手」に

においては、階層が下位の名詞ほど方向格を取りやすい結果とはならなかった。根拠としては、30代で親族名詞と無生物名詞でのみ方向格が容認されたことである。名詞句階層上の位置づけから親族名詞と無生物名詞の間の、人間名詞と動物名詞で方向格が使用できることが想定されるが、使用できなかった。この理由について、現時点では分析を示せていない。以上より、名詞の有生性によって方向格の容認度に違いが生じるものの、必ずしも名詞句階層が下位の名詞ほど方向格を選好するわけではないと言える。

この結果を、佐々木（2019）と比較する。佐々木（2019）は日本語の斜格要素において意味役割だけではなく、名詞句階層上の位置づけが重要な役割を果たすと指摘しており、その具体例として三芳方言の「授与の相手」における格標示の体系を挙げていた。本論文では佐々木（2019）が指摘していた「授与の相手」に加え、「変化の結果」においても与格と方向格の使用範囲の違いに名詞の有生性が関わっていることを説明できた。

### 5.1.2. 「移動」と「停滞」の局面

与格と方向格の選好に移動の局面が関わることと、移動の局面が大きいほど方向格を取りやすいという仮説を立て調査を行った。その結果、移動の局面は「移動の着点」における与格と方向格の使い分けに関わっていた一方、「授与の相手」「変化の結果」「場所」には関わっていなかった。以上より、移動の局面は「移動の着点」における方向格の容認度に影響を与えることが分かった。

ここで、移動の局面によって方向格の容認度が変化した「移動の着点」について、下地（2016）の「移動」と「停滞」の概念を用いた特徴づけを行い、その特徴と方向格の容認度との関係を見る。本論文において「移動の着点」としてまとめていた例文を、動詞が「停滞」の意味を含むかどうかという点に着目して2つに分類する。すなわち動詞が「移動」の意味しか含まない例文を「移動の目標」、動詞が「停滞」の意味を含む例文を「移動の着点」とする。これを調査結果と照らし合わせると以下ようになる。

(43)「移動の目標」は、動詞の意味の中心は移動にあり停滞を含まない。全世代で方向格を使用することができる。

(44)「着点」は、動詞に停滞の意味を含む。文脈設定により移動の局面を大きくした場合、方向格の容認度が変わらないか、移動の局面が大きい方が方向格を選好するようになる。

このことから「移動」と「停滞」という概念は、諫早市方言においても方向格の選好に関与的であると言える。

### 5.1.3. 方向格の拡大過程（通時的な変化）

与格と方向格の選好には、世代差が関わるという仮説を立て、20代から80代の話者を対象に調査を行った。その結果、80代の話者に比べ60代以下の話者は使用範囲が拡大しており、「移動の着点（到達点）」は全世代で方向格を使用できることが分かった。

この結果を、東北方言の方向格の発達過程を推定していた小林（1994）と比較し、九州方言における方向格の拡大過程が東北方言と類似していることを示す。図4は東北方言における方向格の発達過程に従って、本論文における方向格の使用領域を世代別に円で記したものである。なお本論文中で世代差を見るために提示した例文は、小林（1994）が提示している例文と全く同じものではない。小林（1994）が各用法につけているラベルから推測される用法と同じ用法となる例を示している。

これを見ると、2点が言える。1点目は「移動の目標」を中心として円が広がっており、60代以下の世代では円が拡大している点である。この円の広がり方は、小林（1994）の推定に大まかに沿う結果であると言える。2点目は、20代は「使役の相手」で、30代は「使役の相手」と「受身の相手（～してもらう）型」で方向格が使用できないにも関わらず、「受身の相手（いわゆる受身）」で方向格が使用できることである。小林（1994）の推定に沿わない結果となった理由に関して、名詞句階層上の位置づけが考えられる。「使役の相手」において与格標示されているのは、親族名詞「孫」であるのに対し、「受身の相手（いわゆる受身）」で与格標示されているのは動物名詞「犬」である。本論文で明らかにしたように、名詞句階層上位より下位の方が方向格を容認しやすい場合がある。なお30代に「使役の相手」を動物名詞「犬」で調査したところ、方向格が容認されたため、名詞の有生性を考慮したさらなる調査が必要であり、名詞句階層上の位置づけも考慮したモデルを示すことが望まれる。

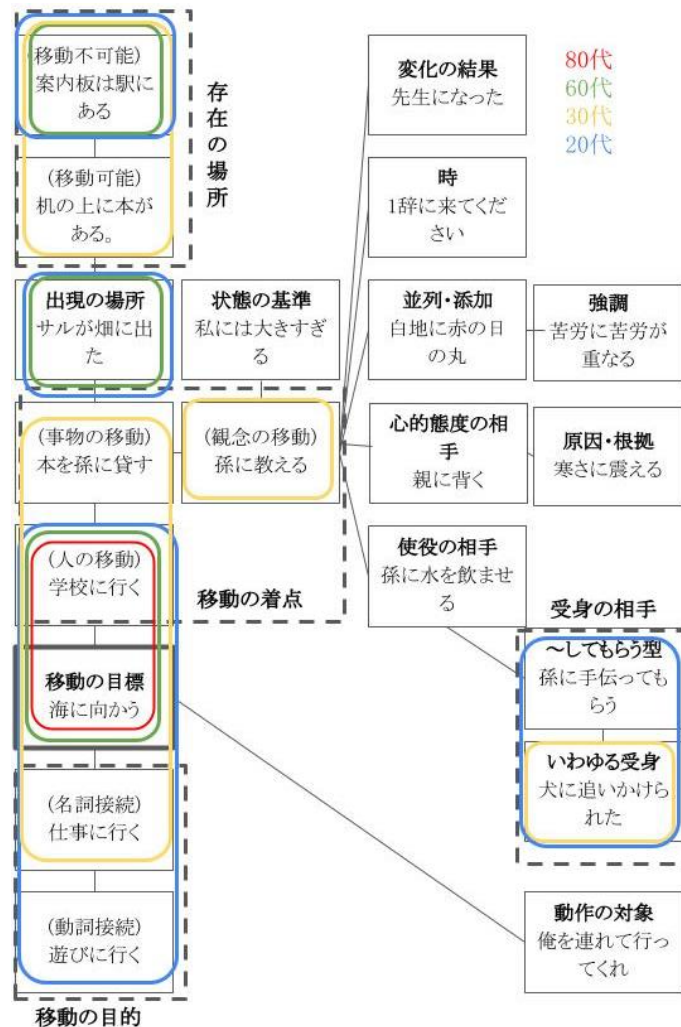


図 4. 諫早市方言における方向格の発達過程  
(小林 1994: 222; 形式は筆者により一部変更)

#### 5.1.4. その他の要因による使い分け

変数として設定した要因以外で、与格と方向格を使い分ける場合が 3 点見られた。1 点目は、人に指示・勧誘する場合に方向格が使用しやすくなることである。この使い分けが見られたのは、30 代と 20 代の話者である。(45)に 30 代話者に見られた回答を示す。平叙文である(45a)では方向格が容認されなかったのに対し、(45b)のように人に指示する場合には方向格が容認されるようになった。20 代は「向かう相手」を例に挙げると、平叙文の場合名詞句階層に関わらず方向格は容認されなかった。しかし勧誘する設定にすると名詞句階層上の 2 人称から無生物名詞まで方向格が容認されるようになった。「授与の相手」でも同様に、平叙文の場合は名詞句階層に関わらず方向格は容認されなかったが、勧誘する設定にすると無生物名詞で方向格が容認されるようになった。この点に関しては、全世代に網羅的な調査を行っていないため、今後明らかにする必要がある。

(45) a. nooto{ni/\*san}                    utusitayo.  
 nooto{=ni/\*=san}                    utus-i-ta=yo  
 ノート{=DAT/\*=DIR}    写す-INF-PST=SFP  
 「(字を) ノートに写したよ。」 (30 代話者)

b. nooto{ni/san}                    utusanne.  
 nooto{=ni/=san}                    utus-a-n=ne  
 ノート{=DAT/=DIR}    写す-THM-NEG=SFP  
 「ノートに写しなさい。」 (30 代話者)

2 点目は、話者に身に覚えがないものが到着する場所の標示に方向格が使用しやすくなることである。80 代話者②と 20 代話者の、「荷物が家に届く。(移動の着点)」という例文の回答で見られ、家に届いた荷物が身に覚えのない荷物だった場合は方向格、自分が知っている荷物だった場合は与格が選好される。

(46) a. nimotuno                    uti{ni/san}                    kitatoyo  
 nimotu=no                    uti{=ni/=san}                    ki-ta=to=yo  
 荷物=NOM    家{=DAT/=DIR}                    来る-PST=SFP=SFP  
 「(自分が頼んだ) 荷物が家に来たよ。」 (80 代話者②)

b. musumeno                    nimotuno                    utingata{san/ni}                    todoita.  
 musume=no                    nimotu=no                    utingata{=san/=ni}                    todok-ta  
 娘=GEN                    荷物=NOM                    うちの家{=DIR/=DAT}    届く-PST  
 「(自分は頼んでいない) 娘の荷物がうちの家に届いた。」 (80 代話者②)

(47) a. ie{ni/san}                    todokuyo.  
 ie{=ni/=san}                    todok-ru=yo  
 家{=DAT/=DIR}                    届く-NPST=SFP  
 「(自分が頼んだ荷物が) 家に届くよ。」 (30 代話者)

b. ie{san/ni}                    todoitottayo.  
 ie{=san/=ni}                    todok-tor-ta=yo  
 家{=DIR/=DAT}    届く-PF-PST=SFP  
 「(知らない荷物が) 家に届いていたよ。」 (30 代話者)



20代、60代、80代話者①に関しては、そのような区別はせずを使用しているとの回答だった。本論文では、区別をする話者が少ないことと、区別が見られた例文も少なかったため調査を行っていないが、今後調査をする必要がある。

3点目は、相手から聞き返されて返事を強調したいときや念押しをするときに方向格が使用しやすくなることである。60代話者の、「授与の相手」「存在の場所」「移動の目的」で見られ、自分の発言を人から聞き返されたとき、2回目の返答に方向格を用いるという回答だった。

(48) (どの畑に肥料をやるのか聞き返されたときに)

ninzinbatake{ni/san}	hiryooba	yarutosa.
ninzin+hatake{=ni/=san}	hiryoo=ba	yar-ru=to=sa
人参+畑{=DAT/=DIR}	肥料=ACC	やる-NPST=SFP=SFP

「人参畑に肥料をやるんだよ。」(授与の相手) (60代話者)

(49) (畑にいるよう念押しするときに)

hatake{ni/san}	onsyai.
hatake{=ni/=san}	or-i-nsyar-i
畑{=DAT/=DIR}	おる-INF-HON-IMP

「畑にいなさい。」(存在の場所) (60代話者)

(50) (どこに行くのか聞き返されたときに)

sigoto{ni/san}	iku.
sigoto{=ni/=san}	ik-ru
仕事{=DAT/=DIR}	行く-NPST

「仕事に行く。」(移動の目的) (60代話者)

本論文では、60代の話者以外で区別が見られなかったため調査項目としていないが、与格と方向格の交替に関わっている可能性がある。

## 6. おわりに

本論文では、与格と方向格の体系、特に両者の使い分けを明らかにすることを目的とし、名詞の有生性と移動の局面という観点を導入して一般化を目指した。その結果、名詞の有生性は、「授与の相手」「変化の結果」「向かう相手」における使い分けの要因となってお

り、そのうち「授与の相手」と「変化の結果」では名詞句階層の順も関与することが明らかとなった。移動の局面は、「移動の着点」における使い分けの要因となっており、移動の局面が大きいほど方向格を選好することが判明した。加えて、80代より下の世代では方向格の使用領域が拡大傾向にあるという、通時的な変化も記述することができた。

今後の課題として、3点を挙げる。1点目は、調査した世代のばらつきである。60代と30代を比較すると、30代の方が、名詞が人間の場合にも方向格を使用できる場合が多くなっている。40代と50代も調査対象に含めることで、通時的な変化をさらに詳細に記述することができるはずである。2点目が、表3におけるD/\*A類を与格の中心的な用法と位置づけ、変数を設定した調査を行っていないことである。この領域も、名詞句階層や移動の局面を変数として設定することで、方向格が容認される可能性がある。1つの用法内で、格がどのように広がっているのかについても調査する必要がある。3点目は、5.1.4節で述べたような、変数として設定した要因以外で与格と方向格を使い分ける場合を調べることである。全ての話者に見られた使い分けの基準ではなかったため調査の対象外としたが、今後の調査で明らかにしていく必要がある。

## 参照文献

- 日高水穂（2009）「格」国立国語研究所 全国方言調査委員会（編）『方言文法調査ガイドブック 3』2-3. 東京: 国立国語研究所 全国方言調査委員会.
- 神部宏泰（1984）「九州方言における方向表現「さまに」の用法を中心に」『方言研究年報』26: 61-80.
- Kishimoto, Hideki（2001）The Role of Lexical Meanings in Argument Encoding: Double Object Verbs in Japanese. *Gengo Kenkyu* 120: 35-65.
- 小林隆（1994）「東北方言における格助詞「サ」の分布と歴史」『東北大学文学部研究年報』44: 217-244.
- 小林隆（1996）「九州方言における方向を表す「サ」の類の用法と歴史」言語学林 1995-1996 編集委員会（編）『言語学林 1995-1996』879-892. 東京: 三省堂.
- 小林隆（1997）「周圏分布の東西差—方向を表す「サ」の類について—」『国語学』188: 96-109.
- 松岡葵（2019）「九州方言における形容詞経験者構文の非典型格標示—宮崎県椎葉村尾前方言と佐賀県武雄市北方方言を中心に—」卒業論文, 九州大学.
- 日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法 2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』東京: くろしお出版.
- 西島宏（1963）「長崎県方言概観」『人文科学研究報告』12: 34-41.
- 佐々木冠（2019）「日本語方言の斜格における意味役割と名詞句階層」日本語文法学会第20回大会パネルセッション. 学習院大学, 2019年12月8日.
- 下地理則（2016）「南琉球宮古伊良部長浜方言の方向格=nkai と与格=n」『琉球諸語記述文法』2: 61-85.
- 角田太作（2009）『世界の言語と日本語』改訂版. 東京: くろしお出版.

## 付録

以下に、本論文作成のために行った質問調査の例文と結果を掲載する。与格と方向格の基本的な使い分けを見るための調査票（日高 2009 に基づく）と、用法別の詳細な使い分けを見るための調査票に分けて示す。調査結果の提示順が、話者の回答順である。話者が自分では使用しない例文には×を、未調査の例文には- を付ける。調査票の上から 1 段目は 80 代、2 段目は 60 代、3 段目は 30 代の回答である。日高（2009）に基づく調査票に関して、80 代は M.M 氏と M.Y 氏の 2 名に行っている。2 名は重複する回答が多かったため、M.M 氏の回答を①として表記し、M.Y 氏の回答を②として表記した。

現代日本語の格助詞「ニ」の用法における与格と方向格の使い分け

格の意味	用法の詳細	用例	回答
相手	向かう相手	隣の人に話しかける。	①tonarino hito{ni/*san} hanasikaku?.
			②tonarinohito{ni/*san} syaberu.
			tonarinohito{ni/*san} hanasikakeru.
			tonarinohito{ni/san} hanasikakeru.
	授与の相手	おばあさんが孫に絵本をやる。	①mago{ni/*san} kuru?.
			mago{ni/*san} hono yaru.
			mago{ni/san} ehono yaru.
	受身的動作の相手	孫がおばあさんに本をもらった。	①baatyan{ni/*san} morota.
			obaatyan{ni/*san} hono moratta.
			obaatyan{ni/*san} moratta.
	引き合いにする相手	大人に体格が勝る。	①takenkoto issyo. oyayoi hutoka.
			×
×			
対象	動きの対象 (対峙する対象)	親にさからう。 (対峙する対象)	①oya{ni/*san} mukau.
			②oya{ni/*san} mukotagena.
			oya{ni/*san} hamukau.
			oya{ni/*san} sakarau.
	先輩にあこがれる。 (心的活動の対象)	先輩にあこがれる。 (心的活動の対象)	①senpai{ni/*san} hikareru.
			senpai{ni/*san} akogareru.
			senpai{ni/*san} akogareru.
着点	移動の着点	子どもが学校に行く。 (到達点)	①gakkoo{*ni/san} itta.
			gakko{ni/san} iku.

			gakkoo{ni/san} itta.
		糸くずが服に付く。 (接触点)	①katanniki/kata{ni/*san} tuitoyyo. ②sode{ni/*san} hittiitobbai.
			sode{ni/san} tuku.
			sode{ni/*san} tuitoru.
	変化の結果	信号が青に変わる。	①ao{ni/*san} kawatta.
			ao{ni/*san} kawatta.
			ao{ni/san} kawatta.
場所	存在の場所	机の上に本がある。	①tukuenoue{ni/*san} attai.
			tukue{ni/*san} hongaru. tukuenoue{ni/san} aruyo.
	出現の場所	サルが畑に現れる。	①hatake{ni/*san} deta.
			hatake{ni/san} detabai.
			hatake{ni/san} detarasikayo.
主体	状態の主体	私には大きな夢がある。 (所有の主体)	×
			×
			×
		私にはこんな難しい本は読めない。 (能力の主体)	×
			×
			×
		私にはそれが不思議でならない。 (心的状態の主体)	×
			×
			×
手段	内容物	新入生の顔は希望にあふれている。	×
			×
			×
	付着物	全身が泥にまみれる。	①tannaka itate yogoreta.
			yuuyuu yogoreta.
			doro{ni/*san} mamiretoru.
起 因・ 根拠	感情・ 感覚の 起因	寒さに震える。	①hiyasyaa hurueta.②hiyoosite tamaran.
			samusade hurueru. samukaken hurueru.
			samusa{ni/*san} hurueru.
	継続状態の	木が強風にしなる。	①kaze{de/ni/*san} yureyobbai.
			②taihuu{de/*ni/*san} kino yureyo?.

	起因		taihuu{de/*ni/*san} kiga yureru. kyoohuu{de/ni/*san} yureyoru.	
時	時点	1時に事務所に来てください。 (時名詞)	①itizi{ni/*san} kitekunsyai. itizi{ni/*san} kitekudasai. itizi{ni/*san} kitekudasai.	
		午前中に宅急便が届いた。 (期間名詞)	①hirumae{ni/*san} kita. gozentyuu{ni/*san} nimotuno todoitabai. haitatu site kurugena. kozentyuu{ni/*san} todoita.	
	目的	移動の 目的	父は日曜日にも仕事に行く。	①sigoto{ni/*san} itta. sigotoni itta. sigotosan iku. sigoto{ni/san} ittayo.
			役割	お礼に手紙を書く。
割合			1週間に2日は酒を飲んでいる。	

### 用法別の与格と方向格の使い分け

#### 【向かう相手】

あなたに聞く。	anta{ni/*san} kikuken.
	anta{ni/*san} kikuken.
	anata{ni/*san} kikune.
彼に聞く。	zimotomon{ni/*san}/ hito{ni/*san} kikou <sup>7</sup> .
	anohito{ni/*san} kiita. kare{ni/*san} kiita.
	kare{ni/*san} kikune.
彼に聞きなさい。	zimotomon{ni/*san} kikanne.
	anhito{ni/*san} kikanne.
	× <sup>8</sup>

<sup>7</sup> 「彼に」が使いにくいいため「あなた」「地元の人」「人」を主語にした回答だった。

<sup>8</sup> 「彼に」を使いにくいとの回答だった。

孫に聞く。	mago{ni/*san} kikeba waka?.
	mago{ni/*san} kiita.
	mago{ni/san} kiitemiru.
孫に聞きなさい。	mago{ni/*san} kikeba wakappai.
	mago{ni/*san} kikanne.
	mago{ni/san} kiite miranne.
先生に聞く。	sensei{ni/*san} kikanba.
	sensei{ni/*san} kiita.
	sensei{ni/*san} kiku.
先生に聞きなさい。	sensei{ni/*san} kikanne.
	sensei{ni/*san} kiiteminsyai.
	sensei{ni/*san} kiitemiranne.
猫に聞く。	neko{ni/*san} kikeba waka?.
	neko{ni/*san} kiita.
	neko{ni/*san} kiku.
猫に聞きなさい。	neko{ni/*san} kikanne.
	neko{ni/*san} kikanne.
	neko{ni/*san} kikanne.
学校に聞く。	gakkoo{ni/*san} kikanba wakaran.
	gakkoo{ni/san} kiita.
	gakkoo{ni/san} kikanba.
学校に聞きなさい。	gakke/gakkoo{ni/*san} kikanne.
	gakko{ni/san} kikanne.
	gakkoo{ni/san} kikanne.
孫に教える。	mago{ni/*san} osieru.
	mago{ni/*san} osieru.
	mago{ni/san} osieru.
犬に教える。	inu{ni/*san} osieru.
	inu{ni/*san} osieru.
	inu{ni/san} osieru.
学校に教える。	gakkoo{ni/*san} osieru.
	gakoo{ni/san} iwanba.
	-

【授与の相手】

あなたに本をあげる。	anta{ni/*san} yakken.
	anata{ni/*san} ageru.
	anata{ni/*san} yarune.
彼に本をあげる。	anta{ni/*san} yaru.
	kare{ni/*san} ageta.
	kare{ni/*san} yarune.
彼に本をあげなさい。	-
	kare{ni/*san} agenne.
	-
孫に本をあげる。	mago{ni/*san} kuita.
	mago{ni/*san} ageta.
	itoko{ni/san} ageru.
孫に本をあげなさい。	-
	mago{ni/*san} agenne.
	-
先生に本をあげる。	sensei{ni/*san} yattaine.
	sensei{ni/*san} ageta.
	sensei{ni/san} yaruyo.
先生に本をあげなさい。	-
	sensei{ni/*san} yattara.
	-
猫に本をあげる。	neko{ni/*san} siitadoo yarodai.
	neko{ni/*san} ageta.
	neko{ni/san} yaru.
猫に本をあげなさい。	-
	neko{ni/*san} yattara.
	-
学校に本をあげる。	gakkoo{ni/*san} honba yatta. honno attoo gakkoo{ni/san} kihu suru.
	honba gakkoo{ni/san} {ageta/ yatta}.
	gakkoo{ni/san} yatta.
学校に本をあげなさい。	-



	gakkoo{ni/san} agetoitara. gakkoo{ni/san} yattottemireba.
	-
あなたに本を送る。	anta{ni/*san} okutte yakken.
	anta{ni/*san} okuttotaken.
	anata{ni/*san} okurune.
彼に本を送る。	anta{ni/*san} okutte yakken.
	kare{ni/*san} okuttotaken.
	kare{ni/*san} okuttayo.
彼に本を送りなさい。	-
	kare{ni/*san} honba okuranbatai.
	-
孫に本を送る。	mago{ni/*san} okutta.
	mago{ni/*san} okuttotaken.
	itoko{ni/san} okuruken.
孫に本を送りなさい。	-
	mago{ni/*san} okuttara.
	-
先生に本を送る。	sensei{ni/*san} okutta.
	sensei{ni/*san} okutta.
	sensei{ni/san} okurookana.
先生に本を送りなさい。	-
	sensei{ni/*san} okuttara.
	-
学校に本を送る。	gakkoo{ni/san} okutta.
	gakkoo{ni/san} okuttabai.
	gakkoo{ni/san} okurune.
学校に本を送りなさい。	-
	gakkoosan{ni/san} okuranne.
	-
孫に貸す。	mago{ni/*san} {kasu/yatta}.
	mago{ni/*san} kasu.
	mago{ni/san} kasu.
学校に貸す。	gakkoo{ni/*san} {kasu/yatta}.

	gakkoo{ni/san} kasu.
	gakkoo{ni/*san} kasu.

【移動の目標】

海に向かう。	umi{san/ni} mukau.
	umi{san/ni} iku.
	umi{ni/san} mukau.
右に曲がる。	migi{san/*ni} magitte hidarisan itatekunsyai.
	migi{san/ni} magari.
	migi{san/ni} magariuyo.

【移動の着点】

ごみをごみ箱に捨てる。	gomibako{ni/san} suteta.
	gomibako{Φ/ni/*san} ussuteta.
	gomibako{ni/san} suteta.
ごみをごみ箱に捨ててください。	②gomibako{ni/san} sutennsyai.
	gomibako{ni/san} irete.
	-
ごみを崖に捨てる。	donda{san/ni} suteta. gake{kara/*ni/*san} hotatta <sup>9</sup> . gake{san/ni} hotatta <sup>10</sup> .
	gake{san/ni} suteta.
	sita{ni/san} {otositayo/suteta}.
野菜を鍋に入れる。	nabennaka/nabe{ni/*san} ireta.
	nabe{ni/*san} ireru.
	nabe{ni/san} iretayo.
野菜を鍋に入れてください。	nabe{ni/san} iretekurenne.
	nabe{ni/san} iretekurenne.
	yasai nabe{ni/san} irete.
火が怖くて遠くから野菜を鍋に入れる。	nabennaka/nabe{ni/*san} ireta.
	ano nabe{ni/san} ireru.
	nabe{ni/san} iretayo.
荷物を玄関に置く。	agaigutinniki/*agaiguti{ni/*san} oitotte.

<sup>9</sup> ごみを崖の下から上に向かって捨てた場合の回答。

<sup>10</sup> ごみを崖の上から下に向かって捨てた場合の回答。

	genkan{ni/san} oitokken.
	nimotuo genkan{ni/san} {oitokken/oitoruyo}.
車の中の荷物を運んで家の机に置く。	tukue{ni/*san} oita. ien naka{ni/san} motteita <sup>11</sup> .
	tukuesan oku. tukueno ue{ni/*san} oku.
	tukueno ue{ni/san} oitayo.
車の中の荷物を運んで家の机に置いてください。	kurumannakano nimotuba {kokosan/koke} oitotte.
	-
	-
バスに乗る。	basu{ni/*san} notteiku.
	basun/basu{ni/*san} {noru/notta}.
	basu{ni/san} noruken.
バスに乗りなさい。	-
	basu{ni/*san} noranne.
	-
長時間並んだ末バスに乗る。	yoiyoisite basuni notta. yatto basu{ni/san} nottabai.
	basu{ni/san} yooyoo noretassa.
	basu{ni/san} nottayo.
黒板の文字をノートに写す。	tyoomen{ni/*san} utusu.
	nooto{ni/*san} utusita.
	nooto{ni/*san} utusitayo.
黒板の文字をノートに写しなさい。	-
	nooto{ni/*san} utusanba.
	nooto{ni/san} utusanne.
荷物が家に届く。	①kokosan kitotta. ienti kitotta. ②nimotuno uti{ni/san} kitatoyo. musumeno nimotuno utingata{san/ni} todoita.
	ie{ni/san} todoita.
	ie{ni/*san} todokuyo. ie{san/ni} todoitottayo.

<sup>11</sup> 動詞が「置く」ではなく「持っていく」が使用された。本論文では「持っていく」は移動の意味が含まれると見なし「移動の着点（移動の局面が大きい）」で方向格が使用できた例としては扱わない。

【変化の結果】

母になった。	oya{ni/*san} natta.
	okaasan{ni/*san} narasita.
	okaasan{ni/*san} narasitayo.
やっとのことで母になった。	yatto oya{ni/*san} natta.
	yuuyuu okaasan{ni/*san} narasita.
	okaasan{ni/*san} narasitayo.
先生になった。	sensei{ni/*san} natabai.
	sensei{ni/*san} natta.
	hanakowa sensei{ni/san} natta.
やっとのことで先生になった。	sensei{ni/*san} natabai.
	sensei{ni/san} nattatoyamonne.
	sensei{ni/san} yatto natta.
信号が青になった。	ao{ni/*san} {nattayo/natabai}.
	ao{ni/*san} kawatta.
	ao{ni/san} kawatta.
信号がやっとう青になった。	yatto ao{ni/*san} natta.
	yatto ao{ni/san} natta.
	singoo ao{ni/san} kawattayo.

【存在の場所】

(サルは) ここにいた。	{koke/*kokosan} otta.
	koko{ni/san} otta.
	koko{ni/san} ottayo.
(誰かに対して) ここにいてね。	{koke/*kokosan} otte.
	koko{ni/san} onsyai.
	koko{ni/san} otte.
(サルは) 畑にいた。	saruno hatake ottayo.
	sokon hatake{ni/*san} ottayo.
	hatake{ni/san} otta.
	hatake{ni/san} ottayo.
(誰かに対して) 畑にいてね。	hatake{Φ/ni/*san} otte.
	hatake{ni/san} onsyai.
	kuruma{ni/san} oranne.

(鎌は) ここにあった。	{koke/*kokosan} attaie.
	koko{ni/san} abbai.
	koko{ni/*san} aruyo.
(鎌は) 畑にあった。	hatake atta. {soke/*sokosan} atta.
	hatake{ni/san} aru.
	soto{ni/san} aruyo.
案内板は駅にある。	eki{Φ/ni/*san} aru.
	annaibanwa eki {ni/san} abbai.
	eki{ni/*san} aruyo.

### 【出現の場所】

(サルが) ここに現れる。	koko{ni/san} kita <sup>12</sup> .
	koko{ni/san} deta.
	koko{ni/*san} detayo.
(サルが) 畑に現れる。	hatake kitotta. hatake{Φ/ni/*san} deta. hatakesan kita.
	hatake{ni/san} detabai.
	hatake{ni/san} detarasikayo.
屋根に草が生える。	yane{ni/*san} kusano {haeta/uwatta}.
	yane{ni/*san} kusaga haeto?.
	yane{ni/*san} kusaga haeru.

### 【移動の目的】

仕事に行く。	sigoto{ni/*san} itta.
	sigotoni itta. sigotosan iku.
	sigoto{ni/san} ittayo.
相談に上がる。	×
	soodan{ni/*san} agaru.
	soudan{ni/*san} agatta.
遊びに行く。	{asobiya/asobini/*asobisan} ittekuru.
	asobi{ni/*san} iku.
	iesan asobi{ni/*san} ikune.

<sup>12</sup> 話者によると「現れる」「出る」は用いにくく「来る」を使用すると言う。本論文では「来る」は移動の意味が中心にあると見なし、出現の場所で方向格が用いられた例としては扱わない。

【使役】

孫に本を読ませる。	mago{ni/*san} hono yomaseta.
	-
	mago{ni/*san} honba yamsetayo.
孫に水を飲ませる。	mago{ni/*san} mizu nomasu?.
	mago{ni/*san} mizuo nomaseru.
	mago{ni/*san} mizuo nomaseru.
犬に水を飲ませる。	ini{ni/*san} mizu nomasu?.
	inu{ni/*san} mizuo nomaseru.
	inu{ni/san} mizuo nomaseru.

【受身の相手】

孫に手伝ってもらう。	mago{ni/*san} tetudatterarau.
	mago{ni/*san} tetudatterarau.
	mago{ni/*san} tetudatterarau.

【いわゆる受身】

孫に追いかけられた。	mago{kara/ni/*san} oikakeraru?.
	mago{ni/kara/*san} oikakerareta.
	mago{ni/*san} oikakerareta.
犬に追いかけられた。	in{kara/ni/*san} owareta.
	inu{ni/kara/*san} oikakerareta.
	inu{ni/san} oikakerareta.

【向き<sup>13</sup>】

木が倒れて横になった。	①yoko{ni/san/si} nattotta.
木が横に倒れた。	②yoko{ni/san/si} uttaoreta.
木の棒を、縦に置く。	①yoko{ni/san/si} yattekunsyai.
	②{tatesan/yokosan} narabete oite.
レモンは、縦ではなく横に切るんですよ。	①tatezya noosite yoko {ni/*san/*si} kitte.
	②yoko{ni/*san/*si} kitte
(道案内で) 横に曲がってください。	①yoko{ni/san/*si} magitte.

<sup>13</sup> 予備調査として、80代にのみ行っている。

【形容詞経験者構文】

雷が怖い。	dorogamisan{no/*ni/*san} esuka.
	dorogamisan{no/ga/*ni/*san} kowaka.
	kaminari{ga/*ni/*san} kowai.

## グロス一覧

ACC	対格
COP	コピュラ
CSL	原因・理由
DAT	与格
DIR	方向格
EMP	強調
FMN	形式名詞
GEN	属格
HON	尊敬
IMP	命令
INF	非定形・不定形・連用
NEG	否定
NMLZ	名詞化
NOM	主格
NPST	非過去
OBL	義務
PF	完了
PST	過去
SEQ	継起
SFP	終助詞
THM	語幹母音
?	機能不明
+	複合境界
-	接辞境界
=	接語境界



## 謝辞

本論文の執筆にあたり、大変多くの方々にお世話になりました。心より感謝申し上げます。まず長期間にわたって調査に協力してくださった祖母と祖母のご友人に深く感謝いたします。また、ご自身の人脈を使って話者の方々と私を結び付けてくださったり、直接お会いしたことがないにも関わらず電話での調査を快く引き受けてくださったりした皆様には、私の拙い調査に最後まで協力してくださったことをお礼申し上げます。

指導教員である下地理則先生は、大学進学まで全く触れたことのなかった言語学について、多くの知識や考え方、調査の面白さや難しさを教えてくださいました。卒論完成までに何度も相談に乗ってくださり、その度に的確なアドバイスをいただきました。

言語学研究室の、久保智之先生、上山あゆみ先生、太田真理先生は、講義や演習で様々な基礎知識を教えてくださいました。研究室の先輩、同期にも大変お世話になりました。松岡葵先輩、宮岡大先輩、廣澤尚之先輩は、お忙しい中論文の相談に乗ってくださり、たくさんアドバイスをいただきました。原田先輩は、親戚の方を話者として紹介してくださいました。ゼミの同期とは中々会えない状況ではありましたが、演習や発表にともに励む存在は、私にとって良い刺激となり、力をもらえました。

最後に、進学のために長崎を送り出してくれた両親をはじめ、いつも私を見守り、支えてくれる家族に感謝いたします。